

series Salamander in the circle

リ・コンストラクション

第五部

第三十一章

Fulfillment of love

峯村 明

リ・コンストラクション

登場人物

31・Fulfillment of love

296.

297.

298.

299.

300.

301.

302.

あとがき

奥付

登場人物

桧山 健	H & L 財団・財務部門勤務
〃 ひろ	健の妻
A. パウジーニ	健の秘書
エドミール	ポルタアウレア大公国の皇太子
X & Y	エドミールのボディーガード
マルガリータ	ポルタアウレア大公妃
竜門渕 優美子	メルノ

31・Fulfillment of love

296.

その晩、芸術部の夏のワークショップ解散パーティが行われ、片や、ポルタアウレアー行のご苦労さんパーティが行われている頃。ユミコはパウジーニに呼び出された。イリチャが会いたいと言っているという。

しばし呆然とする。「——私に？」「貴女にです」

竜門渚ユミコはイリチャとは面識がない。なぜ——

パーティの喧騒にぼんやりしつつ、廊下を歩いていくと、エドミールが追ってきた。「ご一緒にします」
会場にいないのかと訊くと、X&Yに任せてきた、と。ユミコは苦笑する。たしかに体がいくつあっても足りなさそうではあった。

*

イリチャは手術台から降ろされ、別室に移っていた。部屋には桧山夫妻とヴァリス医師がいて、ユミコが来るのを待っていた。
「イリチャ」とひろが声をかける。眼球を保護しているため目が見えないのだ。「ユミコさんが見えたわ」

イリチャはゆっくりと右手を持ち上げた。ユミコは、つと歩み寄ってその手を両手で取る。
「竜門渚ユミコです」さて、なんと声をかけたものか。「……痛い？」

イリチャは唇の端を持ち上げてちょっと笑って少し首を振った。「歌ってくれた、でしょう？ ぼくのために」

「……どうして」

「魂が発する響きは間違えようがありません。貴女はぼくのために歌ってくれた。とても、楽になった。ありがとう」「バイスロイも」

「ああ。早くよくなれ」

＊

退出するユミコとエドミールを送ろうと、彼らについていこうとしたパウジーニは背後から襟首を掴まれた。

＊

崩壊したバンケットホール跡の上には月がでている。月の下で、ユミコはさめざめと泣いた。なぜ泣けるのかわからない。涙が溢れてとまらない。エドミールは上着を脱いで、立ちつくしているユミコの肩にかけてやりながらつぶやいた。「部屋まで送しましょう」

と、その時。

誰かがバンケットホール跡にばたばたと飛び出してきた。
「……ありゃ？」、と頓狂な声。「え？ ユミコおばさん？」

「ヤスオちゃん？」

いい感じだったのに！！ この野郎！！ エドミールは口の中で思いきり罵った。雰囲気ぶち壊した。

「カワイ亭のヤスオちゃん？」

「やっぱり本家のユミコおばさんだ！ いや～、何年振りすかね！ お久しぶりー！ あれ、こんなとこでなにやってんすか？ エドミールのおっさんなんかと」

「イリチャのお見舞いに」

「あー、やつ、ケガしたんだって？ なーにだいじょうぶだいじょうぶ。ヴァリスのあんちゃんもいるしさ。おいらもちよいと見舞いに來たんだ。あ、もいっかい行きましょ、積もる話もあるし、ね？」

「ユ、ユミコさん、こいつと知り合いなんですか！？」

「え、ええ、竜門漕と河合は祖母の代から——」

ユミコが言いかけているのに河合ヤスオは彼女の腕をつかんで引っ張っていく。

月の下にひとり残されてエドミールは立ちつくす。祖母の代から？

すると、なにか？ 竜門漕めるのは河合なにがしと結婚したということか？？

297.

ひゅ〜と音をたてて、心の中を冷たい風が吹き抜けていく思いだ。

あれほど燃え上がった熱い夜はどこへ行ってしまったんだ——

*

本部建物内にある劇場は研修目的で造られたものだったが、有効に使われているとはいいがたかった。舞台設備は言うまでもなく、防音設備、音響設備、照明設備、いずれも申し分ないレベル。お手頃な広さ。サーディク自身、研修用にはもったいないと思っていた。自分用に欲しいと、こっそり思ってさえいた。

そこでワークショップ最終日にこぢんまりとバンド演奏を目論んでいたわけだが……目論見は思いがけない方向へ展開してしまった。彼のボディガード予備軍が、マスターと連絡が取れないのをこれ幸いとばかりに、楽器を抱えて乗り込んできた、と知ったのは当日の朝。

マスターの安否はともかく彼らはもう、やる気まんまんだった。開放するなり、発散させてやらないことにはどんな惨事が出来(しゅったい)するか——彼らは野獣か？——わからない状態だったのだ。

さいわい、学生たちには内緒だったが時間は確保してあった。ワークショップ終了から解散パーティまでのほぼ二時間。ここへ"ぶっこむ"のだ。

本日終業後に臨時のコンサートを開催する、と事前にアナウンスがされていたので、仕事を終えた職員たちは劇場に集まって来た。サーディクのネームバリューもあったが、金管楽器主体のバンドとやらがなにをしてくれるのか興味を誘っていた。

ほぼぶっつけ本番だったが、来場者が席について落ち着くまで、軽いナンバーをBGMのように流し、足慣らし。そして開演。本番。

劇場に残っていた最前までの緊張と昇華の気分が、ものの見事に吹き飛んだ。音は物質的熱風となって劇場内を、ドラムスのリズムは心身を揺さぶった。

もちろんというかなんというか、サーディク直伝の彼らである。歌って踊って芝居もできてしまう。そういうのが十何人もいる。そういうのが所々で歌い踊り、寸劇で笑わせる。肝心の演奏もロックありジャズあり映画音楽ありとバラエティ豊か。なおかつ全体が破綻することなく、まとまっている。そして観衆を飽きさせない。

"コンサートマスター" Z のセンスに、さすがのサーディクもうなる始末。かつては猛練習でさんざん泣かせてきた予備軍がここまでやってくれるとはと、感無量感に浸るほどの出来。最後にキレのいいジャズナンバーでアンコールに応じ、軽快に締める。

観衆は……老人クリスマンも例外ではなく……身も心も燃え尽きたという満足感のうちに、拍手喝采を贈った。

そして。

問題はここからだった。

ほとんど出番のなかったサーディクがブラックスーツで再び登場。バイオリンを携えているのを見て聴衆は静まり返る。

舞台の反対側からもうひとり。さざ波のような水色の衣装をまとった黒い髪の麗人。

荒海と時とがふたりを隔ててしまった

友よ

さまよう日々も失意の日々も
君を忘れたことはない

夕暮れのひなぎくを忘れたことはない

時は去り 時は来る

幸い君にあれ

これが聴きたかった。バイオリンを弾く手が震えた。彼女の歌う《Auld Lang Syne》はサーディクを震撼させた。むろん、その夜、フルバンドのステージに立った者たちも。熱狂した後の聴衆たちをも。

298.

ポルタアウレア行きの飛行機に乗る前に、ユミコはXに尋ねた。「エドミールさまは？」

臨時にユミコの執事を兼任することになったXである。
「真っ先に搭乗してもらいましたよ。なにしろ昨夜からぜんぜんつかまらなくて。あ、マスターの上着？」

昨夜借りたまま返しそびれてしまい、深夜に届けにいくのも気が引けて、今朝まで預かっていたのだと、ユミコは言った。

「それは正解でしたね。学生たちと明け方まで話し込んでいたようなんです。二日間ほとんど寝てらっしゃらない。目が覚めているときに飛行機に載せてしまいませんかね」

「……………」

「……学生たちも相当ショックを受けたのですよ。『最後に登場した歌姫はどういうひとなんだ？』、と」

「あたしはただ——エドミールさまに言われるままに——それより、みなさんの演奏は素晴らしかった！」

いやいや、とXは首を振って笑った。

＊

明け方まで学生たちと話し込んでいたというのは本当で、そのうえ、朝早くに南米から戻って来たラウレンス氏と会わなければならず。頭は動いているがちょっとくたくた状態の殿下である。河合ヤスオもラウレンス氏も一昨日の本部での事故を聞きつけて急ぎよの帰国であった。

ファーストクラスに通されてようやくひとりになれた。今回はボディーガードとの三人旅ではない。二十人近い、それも男ばかりの大所帯である。うんざりするような団体旅行だ。ユミコさんは大丈夫だろうかと気になる。男たちにちょっかいを出されていないだろうかとか、気になって仕方がない。かといって、個室に招き入れるわけにもいかないし。

「少しお休みください」とYが小うるさいので寝たふりをしておく。これならあれこれ言われずにすむ。ポルタアウレアまで二時間あまりのフライト、眠るには微妙な時間だな、と考えてるうちに意識が無くなった。

なんとも慌ただしい数日間であった。

299.

フルバンドのメンバーはポルタアウレア空港で名残惜しく解散し、殿下はボディーガードYと、ユミコはXと、別々の車で王宮へ入った。

当然だが、ブリュッセルと空気が違う、とユミコは思った。花の香りか果物の香りか。ほのかに甘く、かぐわしい。街並みは象牙色と金。緑が多く、緑の中にレモンが太陽に輝いている。夢のように暖かく、陽の光が目には沁みる。

「しばらくご不便かもしれませんが、侍女を二名、調整中です」とXはいう。

ふたりも！？ 自分のことは自分でできるのに。ユミコは驚いたが、見ず知らずの国の、それも王宮である。日本にいるのとではわけが違うだろうと考え、任せることにした。それほど長い滞在になるとは、考えられなかったし。

ひとりでとる食事には慣れていたが、濃密な数日間の後。少々味気ない。

Xは必要以上に近寄ってこない。必要以上に近寄るなど、釘をさされていたからだが。

それでもここの食事は美味しい。パンもハムも野菜も、ワインも。なんというか、違和感がない。すんなりと体に馴染む。これなら一生食べていられるかもしれない、とおかしなことを考えて、ひとりで笑った。

持参した原稿とH&Lから借りて来たパソコンをキャビネットにしまって鍵をかける。一応、エドミール殿下の通訳兼日本語教師という名目で来ているユミコだったが、この原稿の存在は、伏せておくように、とエドミールから言われている。故人とはいえ、ソフィア公女の個人情報だからだ。

「散歩などされてはいかがですか」、ふいにXが提案してきた。それもそうだ。窓の外、木立の向こうはバラ園だ。昼下がりのバラ園を散歩しよう。

建物を出て、バラ園に差し掛かったあたりで、足元をなにかが走り抜けた。今のは――

(え――まさか――)体が動き、足は後を追う。(どっちへ行ったの――)

すると、道の少し先の角で、「あっ」と、男の声がした。

そして女の声。「あらまあ」それから、「ほほほほ」「……パンテオラ総督のジャガーね」

黒いカゲを追って下を見ていたユミコは、顔をあげた。車椅子の婦人、そのうしろに、エドミール。

「母上！ バラムをご存知なのか！？」

「ほほほ……もちろん」

ユミコは驚きのあまり声が出ない。車椅子の婦人が黒猫のバラムの正体を知っていたから、ではなかった。そうではなかった。

「お、おかあさま！？」

「おお。メルノ——」

「おかあさま！？ おかあさま！？ おかあさま！？」

「おお。おお。ほほほほほ」

ユミコは「おかあさま！」と呼ばわり、駆け寄り、泣きながら婦人の膝に突っ伏してしまった。

「ちょっと待って、え？ おかあさまって？ なに？ なんなんですか？」

「エドミールさま、このひとは、ボムソワール・レダ。メルノの母です」

300.

思いもよらない展開に頭が追いつかない。

「え？ どういうことですか？ 母上、まさか、ユミコさんは私ときょうだい??」

「バカなことをおいいでない。エドミール。私の肉体はそなたの母。魂はメルノの母。おわかりか？
そなたたちに血の繋がりはこれっぽっちもありませんよ」

「は、はあ——」

「おかあさま——」

*

「そういえば、ボムソワールの女主人は舞踏家でしたな……」

「やっと思い出しましたか。バイスロイさま」

「いや、母上、そうならそうと、なぜもっと早く教えてくださらなかったのですか」

「もっと早く教えたところで、そなた、受け入れられましたか？」

「——いえ——」

メルノの存在があって初めて実感がわくのだと、彼は気づく。すると——
「もしや母上、メルノがここへ来るのを、ご存知だった？」

「そなたが連れてくるのだという予感がありました。間に合って、よかった」

さんざん泣いたせいでメイクがすっかり崩れてしまっていたがメルノは顔をあげた。「間に合った？」

ふふふふ、とマルガリータ大公妃＝ボムソワール・レダは優しく笑った。
「そなたになにがあったのかは、もはや聴きますまい。母の私的な願いは、ただ娘の幸せ」

「おかあさま——」

「ねえ、エドミールや」

「は」

「そなたが慎重にならざるを得ない、その理由はよくわかります。けれども、時は流れ、時は移ろう。ひとの気持ちもまた。語ることで想いは伝わります」

「……………」

「ね？」

「はい」

さやさやさやさやと葉擦れの音。バラの間を飛ぶミツバチの羽音。ふたり木蔭のベンチに腰かけ、車椅子の大公妃と向き合っている。大公妃がふいに言った。

「今年はソフィアさまのお墓参り、どうされました？」

301.

7月の終わり、彼らは真冬のオーストラリア、アデレード・ヒルズを訪問した。ソフィア公女の墓参りである。そこはかつてドイツ人移民が開拓した土地で、ソフィアも共同墓地に埋葬されている。

アイアンのフェンスが続く石畳を歩く。雲の切れ間から陽射しもあり、大公妃が貸してくれたロングコートのおかげでそれほど寒くはない。墓所の周囲にバラの低木が植えられている。去年までなかったものだ。

健はなにも言っていなかったが、去年供えたバラを挿し木して殖やしたのではないかとエドミールは思った。素人には難しいが、園芸業者にならどうということもないだろう。ユミコも、「宮殿のお庭のバラと、同じ種類ですね」とつぶやいた。

「ふしぎな、場所」

「……………」

「エドミールさまは何度もこちらへ？」

「ええ、数えきれないほど。たとえば、ソフィアと語りあいたくなった時」

「……………」

「彼女の命日もありますが、だいたい冬です。夏場はぶどう園に大勢の人がいる。

——健は六年前にオーストラリアに引っ越してきて、五年目、つまり去年の墓参りで私と出くわした。それまではすれ違っていたのですね。おかしいものです、出会いというのは。彼に会わなければ、あなたとも出会わなかったかもしれません。ご存知かもしれませんが、間宮宮司は健の奥方、ひろの父御」

ユミコが驚くのを見て、エドミールは微笑んだ。

「ちなみに、ひろの魂はマミヤという名です」

「前にお話しましたが、間宮宮司のところへは、人生相談に行ったのです。ブリュッセルへ行く途中で、道程としてはかなり遠回りでしたが」

何か言おうとするユミコに、エドミールは被せるように続けた。

「行っただけの価値はありました」、と。

＊

冬枯れのアデレード・ヒルズを夕陽が照らしている。

夏のブリュッセルから常春のポルタアウレアへ、そして真冬のアデレード・ヒルズ。
ブリュッセルに着いてから続けざまに起こったあれこれを振り返ればあまりの濃密さに頭がぐらくらす。現実感に乏しく、夢の中にいるようだと思ふ。
うっかり小石を踏んでしまい、バランスをとろうと泳いだ手を、取って、支えてくれる人がいる。力強く、温かな手。この手をずっと夢見ていたような気がする。

（触れ合うこともなく、私を置き去りにした手――）

助けてほしかったのに、戻ってこなかった手。

キリガミネで事情を明かされなければ、心の奥底でこのひとを恨み続けていただろう。
（私は……このひとを理解しようとしなかった……）
でも今は、このひとの言葉のひとつひとつ、行動のひとつひとつの陰に、ユミコ自身を感じる。このひとのなかに、ユミコ自身がいる。気のせいなんかじゃない。

それなら、私の中にいるあなたを、あなたは感じるでしょうか。転生を重ねてなお、あなたを恨み続けた私を。そして、今は――

302.

アデレードの桧山邸はちゃんと空調設備を具えているが、今日は暖炉に火が入っている。人工的でない、自然な温もり。

「初めてこの屋敷に足を踏み入れた時、無人だったにもかかわらず、もしかしたらソフィアは幸せだったかもしれないと思いました。大公家のベーゼンドルファーが……ソフィアの兄が彼女に贈っ

たのです……なんの違和感もなく、しっかりと収まっている。幸せは物質や環境ではないとわかっていても、私は、そう感じた」

「わかるような気がいたします」と、ユミコは応える。「やさしくて、あたたかい——」

「たぶん、桧山家がそうなのでしょう」

エドミールはベーゼンドルファーの前に腰かけ、ロマンティックなワルツをゆっくりつま弾く。

『森の中に木があるそうよ』

つぶやくようにユミコが歌う。

古い映画のテーマ曲だが、知っている人は少ない。ちゃんと歌詞があることを知っている者はもっと少ないだろう。けれどユミコはこの曲も歌詞も知っていた。

ピアノのキーはユミコの声のキーに合っている。声はユミコだが背後にある波動に、エドミールの魂であるバイスロイが震撼する。

『その木はあなたを手招きする

一緒に行きましょう

スイートハート・ツリーへ

そして 私の名前の隣に あなたの名前を彫りましょう』

《SWEET-HEART TREE》(あとがき参照)

「いっしょに行きましょう」

「ええ。ふたりの名前を刻みに」

*

それからエドミールは、思いがけないことに気づくことになる。それは間宮神社の桜の花の下で初めてユミコを見た時の衝撃に似ていた。

もしも、このひとを失うようなことになったら、自分は耐えられないだろう、というものだった。

そして、シパドの気持ち、シパドの執着が、理解できると思ったのだ。

31・「Fulfillment of love」

32・「」へ続く

あとがき

映画『THE GREAT RACE』(1965/米)

出演 ナタリー・ウッド / トニー・カーティス / ジャック・レモン / ピーター・フォーク / 音楽 ヘンリー・マンシーニ / 監督 ブレイク・エドワーズ

冒険家グレート・レスリー(トニー・カーティス)が「ニューヨークからパリまで」のドタバタ自動車レースに出場する。

彼と対立するいかにも悪役然としたフェイト教授(ジャック・レモン)、終始足を引っ張るマギー(ナタリー・ウッド)。のどかな世界の中でレースと恋は進み、ナタリー・ウッドが森の中で、ギターを爪弾きながら歌うのがこの「The Sweetheart Tree」

They say there's a tree in the forest,
A tree that will give you a sign;
Come along with me, to The Sweetheart Tree,
Come and carve your name next to mine.

They say if you kiss the right sweetheart,
The one you've been waiting for,
Big blossoms of white will burst into sight
And your love will be true evermore.

「ナレ死」ならぬ「ナレコン」ですね。音楽を描写していると本筋から外れてしまうし、まあ、音楽より寸劇の方がイメージしやすい、ボディガード衆全員がマスターの影武者が務まるというのがミソでして、これは文章より漫画的に絵で描写、それとも映像で…あ～そんな絵力ないし、それこそ本筋から外れてしまう。と、悩ましく悩んで結局、なしになりました。でもいつか番外編的にやってみたい。

番外編と言えば、大人の恋愛にはなくてはならないでしょうという、ソレですが。健とひろが仮祝言のあとに…というのを考えなくもなかったですが、今問題になっているアラフォーふたりの恋愛の方が、なくてはならないはずなんですよね。だいたい二十歳前後の恋愛とは乗り越えてきたものの質、重ねてきた時間もちがいますからねえ。でも本編には入れられないし、て一と、十八歳以下禁表示にして有料にするとか、ああ、悩ましい。

サブタイトル『Fulfillment of love』は、恋の成就。

2025年10月4日 記

奥付

リ・コンストラクション

第三十一章 Fulfillment of love

2025年10月5日初版発行

著者

峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材

[イラストAC](#)

[百花繚乱](#)

制作

Puboo

発行所

デザインエッグ株式会社